広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

現代の生活になじむ楕円形のボウル
小鹿田の新たな可能性を探る

坂本 創　大分／小鹿田焼陶工

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。

「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUS が掲げる「二律双生」を、地方創生 × モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

大分県選出の匠、小鹿田焼陶工の坂本創さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

1月24日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

自然の力と人の手 伝統的技法を守る

大分県日田市北部、福岡県との県境に位置する小鹿田（おんた）皿山地区。北に英彦山がそびえ、大浦川が流れる小さな山里には、約300年前から絶えず唐臼の音が響く。江戸時代中期に開窯した小鹿田焼は外部から弟子を取らなかったため、開窯以来の伝統的な技法がそのまま受け継がれてきた。

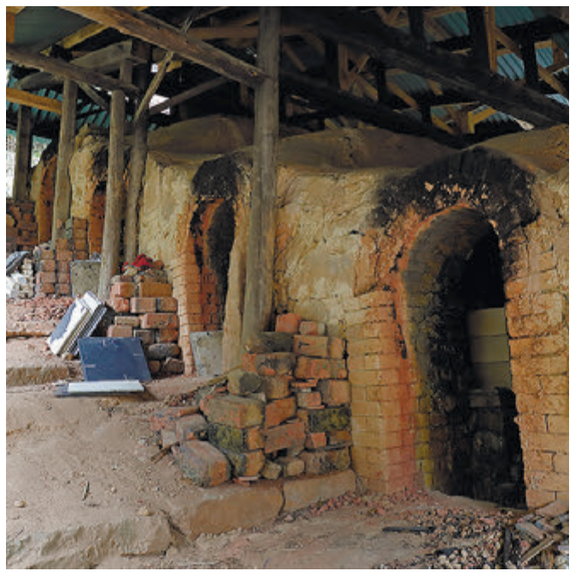
唐臼

自然の力と人の手によって生み出される小鹿田焼は国指定重要無形文化財。機械を使わないこと、手作りの道具を用いた独特の技法を用いること、作品に窯元名でなく「小鹿田」と入れること―など、いくつもの厳しい決まりがある。集落近くの土を使い、川の水力を利用した唐臼で砕き、杉などのまきを燃料にした登り窯で焼成する。水と土と木という地域の資源を人間が巧みに利用した生業だ。

坂本工窯は現在10軒ある窯元の一つ。小鹿田焼の技法は一子相伝によって受け継がれる。創さんは2010年から父・工さんと共に働き、腕を磨いてきた。これまでにも展示会などで多数の作品を発表してきたが、「小鹿田焼の新たな可能性を提案したい」という思いがプロジェクトへの参加を後押しした。

「私たちは同じものを作り続ける仕事だが、職人の仕事に一つとして同じものはない。スタンダードなものを作り続けるためには、進化が必要だ。今、昔ながらの大皿は一般家庭でなかなか使われなくなっている。現代の生活になじむ小鹿田焼に挑戦してみたかった」と話す。

全てが手作業で行われる小鹿田焼。器の出来は職人の技量に左右される。「ごまかしの利かない仕事。目や耳から入った知識を自分の中に取り込み、『こうしたい』と手を通して器に伝える。職人としての経験は足りないかもしれないが、自分がすることで若いうちだからこそできるチャレンジがあると伝えたい」。小鹿田焼を共に守る後輩への思いもにじませた。


登り窯で焼成する

成形が終わり天日乾燥中の陶器

エリア・コンサルティングの様子

試行錯誤を重ね3種の作品完成

坂本さんが挑戦したのは、現代の暮らしに調和する楕円（だえん）形のボウル。「伝統的な蹴ろくろと登り窯を生かして、今まで丸い形のものばかりだった小鹿田焼の新たな可能性を探りたい」と話す。

原材料の精製、器の成形、焼成と器ができるまでの過程で小鹿田焼の特徴を踏襲した上で、使い勝手の良いボウルの深さや、手に持ったときにしっくりくる側面の丸みを追求。使い方を具体的に想定しながらフォルムをつくっていった。小鹿田の土は「使い勝手を考えて薄くすると割れてしまう」という。器の厚みも土と対話する中で導き出した。

蹴ろくろを用いて楕円形を安定的に作るには、職人の鍛錬が必要とされる。「形が安定するまでに、だいたい100個くらい作らないといけない。まだ採算が取れないな」と苦笑するが、「慣れてくれば、もっと早くできると思う」とも。挑戦を楽しむように土と向き合った。

蹴ろくろを用いて成形する

坂本 創
大分／小鹿田焼陶工

1990年大分県日田市小鹿田出身。江戸時代から現代まで約300年、10軒程の窯元が長きにわたり家族で窯を守っているのが特徴の「小鹿田焼」の陶工。幼少の頃から土に触れあい、佐賀県立有田工業高等学校卒業後、クラフト館岩井窯山本教行氏に師事。2010年、父である工氏の窯元に入り、現在小鹿田焼坂本工窯に陶工として従事。

エリア・コンサルティングに合わせて、坂本さんは釉薬の具合や技法の異なる試作品を複数制作。窯を訪れた下川氏に助言を求めた。粘土と水を混ぜてクリーム状にしたスリップ（泥漿（でいしょう））で表面を装飾し焼成したスリップウェアの手法も導入してはというアドバイスを受け、化粧土を利用した柄を取り入れた。シリーズの特徴として斜めにカットした縁を採用することなど、「モダンな小鹿田」の表現について議論した。釉薬についても研究を重ねた。小鹿田焼は化学薬品が使用できない。自然のものの配合を変えて新しい質感ができないか試作した。器の色味は窯に並べた位置や温度でも変化する。

試行錯誤を経て、3種の作品が「ONTA BOWL」として完成した。刷毛目を用いた色違い2種と櫛描き1種。いずれも大中のサイズ違いで展開している。モダンな印象を与えるよう調節された釉薬によって器は柔らかい光を放ち、斜めの縁が心地よいリズムを与えている。「民芸という分野以外の広がりを持たせたい」という意図が、器に映し出された。

「小鹿田焼の要素を凝縮して、形を変えたらこうなった。小鹿田の職人はどんな形でもできると伝えたかった。この挑戦は5年、10年先の糧になる」。伝統を受け継ぐための進化が、そこにある。

完成プロダクト「ONTA BOWL」

作業道具

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT